

ウルドゥー語とパシュトー語の比較研究
—能格構造を中心として—

八 代 隆 政

**Comparative Analysis on the Ergative Construction
in Urdu and Pashto**

Takamasa Yashiro

Given transitive and intransitive sentence constructions, there are ideally two types of languages; nominative-accusative languages and ergative-absolutive languages. In a nominative-accusative language like Latin, the subject of an intransitive verb is functionally identified in some manner with the subject of a transitive verb, and two are referred to as nominative case. In an ergative-absolutive language, commonly termed merely 'ergative language', there is a functional identity between the subject of an intransitive and the object of a transitive; these two are termed absolutes or absolutive case. The subject of a transitive verb, called the ergative case or ergative, is distinct.

A good number of ergative languages, which are generally referred to as split ergative languages, assign varying case-marking patterns on the basis of tense or aspect. For example, Urdu, Hindi and Punjabi show the ergative-absolutive patterning only in the perfect aspect. Pashto accepts the nominative-accusative construction in the non-past tense and the ergative-absolutive construction in the past tense.

This paper is devoted to a consideration of the split ergative

phenomenon in Urdu and Pashto. The first two sections show certain general characteristics that have been noted in ergative and split ergative languages. Section 3 covers some matters related to the ergativity of these two languages ranging from morphological to syntactic. Section 4 examines the particular features in Urdu's perfect aspect of the case-marking pattern based on the semantics of the verb, with volitional verbs requiring the ergative-absolutive pattern and non-volitional verbs being of the nominative-accusative pattern.

はじめに

多くの印欧語では、述語動詞の示す行為を行う主体が原則的に主語となり、自動詞文と他動詞文を問わずその主語は主格の形をとる。他動詞文の目的語は対格で示され、述語動詞の活用は主格主語と呼応する。これを主格構文または主格・対格構文という。

ところが、かなりの数の言語で、この主格構文とは違った構造をもつものが存在する。自動詞文の主語と他動詞文の目的語が絶対格で表され文法上同一機能を果たし、他動詞文の主語はそれらとは異なる文法的範疇、いわゆる能格で示される組織構造を有するものを能格構文または能格・絶対格構文という。

ピレネー山脈の西北部で話されているバスク語をはじめ、印欧語域の東方に隣接するコーカサス諸語（グルジア語など）、インド・イラン語派の主要言語（ウルドゥー語・ヒンディー語、パンジャービー語、パシュト語など）、カラコルム山脈に孤立して存在するブルシャスキ語、フィリピンのタガログ語、さらにはオーストラリア諸語やアメリカ・インディアン諸語の一部、そしてエスキモー語など、およそ世界の4分の1におよぶ言語に、さまざまな形で能格構造が認められる。

能格構文の文法構造については、それぞれの言語において多様性を極めているが、多くの言語では、条件次第で主格構文をとったり、能格構文をとったりしている。名詞あるいは動詞の意味論上の階層または範疇によって主格構文と能格構文の分岐が決定されたり、時制／相／法のいずれかのある条件に限り能格構造が出現する場合がある。このようにある言語内で各条件のもと主格構造が形成されたり、能格構造が出現したりするものを「分裂能格」という。

拙論では、能格の基本的特徴を概観した上で、典型的な分裂能格の言語であるウルドゥー語・ヒンディー語、パンジャービー語（以上インド・アリア語派）およびバシュトー語（イラン語派）の能格構造を比較分析することによって、インド・イラン語派の能格性を明らかにしていくこととする。

1 能格について

英語あるいはドイツ語をはじめとするヨーロッパの主要な言語では、自動詞文・他動詞文を問わず文の主語は主格 (nominative) の形をとり、他動詞文の目的語はそれと対立して対格 (accusative) で示される。(1)–(2)の例でドイツ語¹の ein Mann (“a man”)、das Mädchen (“the girl”)、ラテン語²の puer (“boy”)は主格で、ein-en Mann (“a man”)、puellam (“girl”)は対格である。

(1) (a) Ein Mann kommt
a(NOM) man(NOM) comes
“A man comes.”

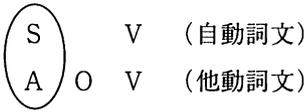
(b) Das Mädchen schlägt ein-en Mann
the(NOM) girl(NOM) hits a(ACC) man(ACC)
“The girl hits a man.”

- (2) (a) Puer venit
 boy(NOM) comes
 “The boy comes.”
 (b) Puer puellam amat
 boy(NOM) girl(ACC) loves
 “The boy loves the girl.”

英語もまた、ドイツ語やラテン語と同じく、自動詞文の主語と他動詞文の主語は両者とも主格で示される。また、he, she (主格) と him, her (対格) のように、人称代名詞のダイアグラムにおいて主格と対格の対立が存在するように、他動詞文の目的語は通常対格とみなされる。

- (3) (a) He(NOM) comes
 (b) He(NOM) loves her(ACC)

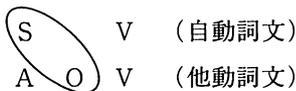
このように自動詞文の主語と他動詞文の主語に主格が用いられ、他動詞文の目的語に対格が表示される構文を「主格構文」「対格構文」(accusative construction) または「主格・対格構文」(nominative-accusative construction) という。語順を考慮せず構成要素 (S = 自動詞文の主語、A = 他動詞文の主語、O = 他動詞文の目的語、V = 述語動詞) だけを抽出した形で図式化すると以下ようになる。主格・対格構文においては自動詞文のSと他動詞文のAは機能的に同一 (= 主格) である。また述語動詞Vの活用はSとAに呼応する。



一方、自動詞文の主語と他動詞文の目的語が機能的に一致し、両者とも中立的な格表示(=絶対格)が用いられ、さらに他動詞の行為の主体が主格とは異なる格(=能格)で示される構文を「能格構文」(ergative construction)または「能格・絶対格構文」(ergative-absolutive construction)という。(4)のバスク語の例³では、(a)の主語Mirenは絶対格であるが、(b)の主語Yon-ekは-ekが付されて能格(ergative)となっている。目的語のPatxiは屈折のない中立的な格表示として示され、(a)の主語Mirenと文法機能的には絶対格で同一である。

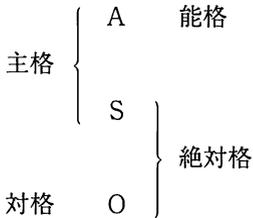
- (4) (a) Miren etorri da
 Mary(ABS) came
 “Mary came.”
- (b) Yon-ek Patxi jo du
 John(ERG) Bill(ABS) hit
 “John hit Bill.”

能格言語における自動詞文の主語と他動詞文の目的語の平行関係は次のように表すことができる。



ここでは、SとOが無標の格＝絶対格となり、Aは行為の主体を示す格＝能格で表される。述語動詞Vは自動詞文ではSと、他動詞文ではAではなく行為の目標であるOと呼応する。

Dixon⁴は次の図式とラテン語とジルバル語（オーストラリア諸語の一つ）の例を用いて、能格構造の基本的特徴を示している。



ラテン語の例文

- (5) domin-us veni-t, the master comes
- (6) serv-us veni-t, the slave comes
- (7) domin-us serv-um audi-t, the master hears the slave
- (8) serv-us domin-um audi-t, the slave hears the master
- (9) domin-ī veni-unt, the masters come
- (10) serv-ī domin-um audi-unt, the slaves hear the master
- (11) serv-us domin-ōs audi-t, the slave hears the masters

(5)(6)は自動詞文で主語の格屈折は-usで主格単数を示す。(7)(8)(11)は他動詞文で主語の格屈折は同じく主格単数の-usであり、同じく他動詞文の(7)(8)(10)の目的語は対格単数の-umに変化している。(5)-(8)および(11)の述語動詞は主語に呼応して3人称単数を表す-tとなる。(9)(10)の主語は主格複数を示す-īと格屈折し、述語動詞は3人称複数を

表す-untとなる。(11)の目的語は対格複数語尾の-ōsをとっている。このラテン語の例文からわかるように、主格・対格構文においては、SとAは同一の格標識(=主格)をとり、Oは対格になる。Vは自動詞文にあってはSに、他動詞文ではAに呼応する。

ジルバル語の例文

- (12) ŋuma banaga-nyu
 father(ABS) return-NONFUT
 father(S) returned
- (13) yabu banaga-nyu
 mother(ABS) return-NONFUT
 mother(S) returned
- (14) ŋuma yabu-ŋgu bura-n
 father(ABS) mother(ERG) see-NOFUT
 mother(A) saw father(O)
- (15) yabu ŋuma-ŋgu bura-n
 mother(ABS) father(ERG) see-NONFUT
 father(A) saw mother(O)

(12)(13)の自動詞文のŋuma、yabuはSとして機能し、(14)(15)の他動詞文のŋuma、yabuはOとして機能し、ラテン語の主格(-us、-i)と異なり無標の格標識=絶対格として示される。一方、他動詞文(14)(15)の主語は、能格標識-ŋguをとらないAとして機能する。なおジルバル語における述語動詞Vは、S、O、Aのいずれの人称・数とも呼応しない。

2 分裂能格について

能格言語のなかの多くのものは、ある条件のもとでは主格構文を作り、その主語は主格または絶対格の形をとる。しかし目的語を要求する動詞、つまり対象活用をなす他動詞では、主格構文を作る場合と能格構文を作る場合があり、その違いが概ね次の3グループに分類できる⁵。

- [第1グループ] 動詞の意味論上の特性によって格表示が決定される場合で、例えば、行為者の意志作用が強く働く動詞は能格構文となり、無意志動詞では主格構文となる。
- [第2グループ] 行為者を示す中核的なNPの有する意味論上の特性によって格表示が決定される場合で、主に談話参加者の主体－客体および有生－無生の階層構造のなかに位置する行為者と受動者（または目標）の相互関係によって、能格構文または主格構文が作られる。
- [第3グループ] 時制または相または法をもとに主格構文となるか、能格構文となるかが決定される。

ここではウルドゥー語とパシュトー語が属する第3グループ、すなわち時制／相／法のある条件のもとに能格構文がつくられるという分裂能格について、時制によって分裂がみられるグルジア語とパシュトー語、相によって分裂がみられるバンジャールビー語とウルドゥー語をみていくこととする。

2.1 時制による分裂

コーカサス諸語の南コーカサス言語群の代表的な言語であるグルジア語では、主格は接尾辞-i、能格は-m(a)、対格・与格は-sで示される⁶。

(16) s̄tudent̄-i midis

“The student goes.”

(17) s̄tudent̄-i çers çeril-s

“The student writes a letter.”

(18) s̄tudent̄-i mivida

“The student went.”

(19) s̄tudent̄-ma daçera çeril-i.

“The student wrote the letter.”

現在形自動詞文(16)、同他動詞文(17)、過去形自動詞文(18)では「学生」は主格で、(17)の目的語「手紙」は与格(グルジア語では対格がないので与格がその役を受け持つ)で表されている。これは前節でみたドイツ語やラテン語などの主格構文と同じである。しかし、過去形他動詞文(19)では、「書く」という行為の主体「学生」は能格形で示され、行為の対象である「手紙」が主格となっている。なお絶対格とは形態論的には無標(unmarked)の格であるが、グルジア語では語尾-iを伴って、普通、主格とよばれているが、この語尾は格語尾ではなく「絶対接尾辞」(absolute suffix)とよばれるものである。グルジア語では、たった一つの名詞表現(core NP)を含む自動詞文の場合には、主格構文を作り、その主語は主格または絶対格の形をとる。しかし、行為者(agent)と目標(goal)(または受動者(patient))の2項NPをとる他動詞文では、主格構文(17)を作る場合と能格構文(19)を作る場合とがあり、その違いが時制の違いに現れている。つまり、グルジア語では、現在語幹では主格構文をなし、アオリスト語幹では能格構文をなすことになる。

パシュトー語は言語系統としてはインド・ヨーロッパ語族のインド・

イラン語派に属する。インド・イラン語派を構成する3支派のうちの一つであるイラン語派のなかで、ペルシア語が近代西イラン語の代表とすれば、近代東イラン語の代表的言語がパシュトー語である。

- (20) zə hāra wradz maktāb tə dzəm
 I(NOM) every day school to go-PRS,1SG
 “I go to school every day.”
- (21) zə yaw kitāb laróm
 I(NOM) a book(M,NOM) have-PRS,1SG
 “I have a book.”
- (22) zə maktāb tə wlārəm
 I(NOM) school to go-PAST,1SG
 “I went to school.”
- (23) mā yaw kitāb dərłōd
 me(OBL) a book(M,ABS) have-PAST,M,3SG
 “I had a book.”
- (24) mā dwa kitābūna dərłōdál
 me(OBL) two books(M,ABS) have-PAST,M,3PL
 “I had two books.”
- (25) mā yawá kitābcá dərłōdá
 me(OBL) a notebook(F,ABS) have-PAST,F,3SG
 “I had a notebook.”
- (26) mā dwē kitābcē dərłōdē
 me(OBL) two notebooks(F,ABS) have-PAST,F,3PL
 “I had two notebooks.”

上の例はパシュトー語カンダハール方言⁷であるが、(20)-(22)の主語「私」は主格で、動詞は自動詞・他動詞にかかわらず主語の人称と数に一致している。(21)の目的語「本」も主格である。(23)-(26)は過去時制の他動詞文であり、行為者（ここでは所有者）である「私」は斜格の形をとり、目的語が単数絶対格または複数絶対格となっている。(23)-(26)の述語動詞はそれぞれの目的語の性と数に呼応した形で変化している。パシュトー語もまた、グルジア語と同じく、現在時制の自動詞文・他動詞文および過去時制の自動詞文では主格構文をなし、他動詞文の過去時制において能格構文となる。

2.2 相による分裂

パンジャービー語もまた分裂能格言語の一つである⁸。すなわち他動詞文において述語動詞が完了分詞からなる文が能格構文をとる。その際、目的語は形態論上、主格構文の主語と同一であり、述語動詞を構成する完了分詞および助動詞は目的語（絶対格）の性・数と一致する。主格構文では、述語動詞の完了分詞とそれに伴う助動詞は主語の性・数に一致する。以下にパンジャービー語の主格構文と能格構文を例示する⁹

(27) mĕ jādā wān
 I(NOM) go-IMPF,M,SG AUX(1SG)
 “I go.”

(28) ó cā pīdā e
 he(M,NOM) tea(F,NOM) drink-IMPF,M,SG AUG(3SG)
 “He drinks tea.”

(29) mĕ aj chetī uṭhēā
 I(NOM) today early get up-PF,M,SG

“I got up early today.”

- (30) mĕ ik xat likhĕā
I(ERG) a letter(M,ABS) write-PF,M,SG
“I wrote a letter.”

- (31) mĕ do xat likhe
I(ERG) two letters(M,ABS) write-PF,M,PL
“I wrote two letters.”

- (32) mĕ ik kitāb likhī
I(ERG) a book(F,ABS) write-PF,F,SG
“I wrote a book.”

- (33) mĕ do kitābā likhiā
I(ERG) two books(F,ABS) write-PF,F,PL
“I wrote two books.”

パンジャービー語では、能格を示すためにウルドゥー語と同じneという格標識を行為者（動作主）の後に付けるが、行為者が人称代名詞の場合は3人称のみにneが付されて、1人称単数と2人称単数は主格と同じ形をとる。また1人称複数と2人称複数はneをとらず語形変化して能格を表す。

以下に示すウルドゥー語の例文¹⁰をみると、パンジャービー語との類似性がよくわかる。ウルドゥー語でも能格の格標識はneであるが、すべての人称代名詞にneが付く点がパンジャービー語と異なる。

- (34) maī jātā hū
I(NOM) go-IMPF,M,SG AUG(1SG)
“I go.”

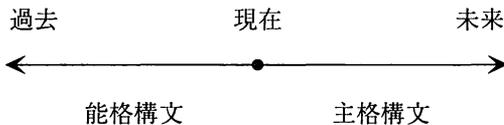
- (35) vo cāe pitā hai
 he(NOM) tea(F,NOM) drink-IMP,F,M,SG AUX(3SG)
 “He drinks tea.”
- (36) maī āj jaldī uṭhā
 I(NOM) today early get up-PF,M,SG
 “I got up early today.”
- (37) maī ne ēk xatt likhā
 I ERG a letter(M,ABS) write-PF,M,SG
 “I wrote a letter.”
- (38) maī ne do xatt likhē
 I ERG two letters(M,ABS) write-PF,M,PL
 “I wrote two letters.”
- (39) maī ne ēk kitāb parhī
 I ERG a book(F,ABS) read-PF,F,SG
 “I read two books.”
- (40) maī ne do kitābē parhī
 I ERG two books(F,ABS) read-PF,F,PL
 “I read two books.”

以上、グルジア語、パシュトー語、パンジャービー語、ウルドゥー語の事例を検証することにより、時制（過去）や相（完了分詞）による分裂能格の特徴を考察した。能格構文の存在は次のような説明が一般にはなされている¹¹：

「ある主体がある行為を行なって、その行為があるものに影響を及ぼす事態を言語に表現する場合、その行為の主体に焦点を合わせることも

できるが、また、その行為そのものに焦点を合わせることもできる。前者の表現が主格構文であり、後者の表現が能格構文である。能格構文では行為に焦点を合わせるため、その行為が影響を及ぼす目的物にも当然焦点が合わせられる結果、その目的物を表わす名詞が絶対格の形をとり、行為の主体たる行為者の方はむしろ斜めに (*in obliquo*) 表象され、したがって、これを表わす名詞はいわば主辞的補語 (*subjective complement*) の役をする能格の形をとるのである。」

また時制 (過去時制) や相 (完了分詞) をもとに分裂能格が現れる根拠については、Dixon(1994)¹²に詳しく述べられている。



過去においてある行為者が行った一連の行為・事件あるいは出来事を、現在を起点に記述する場合は、事実そのもの、すなわちその残された対象物や行為そのものに焦点を当てて記述することも可能である。一方、一連の関係する行為 (X、Y、Zとする) を行う行為者に焦点を合わせると、現在Xという行為に着手している行為者というのは、Yという目的に向かっていて、そして最終的に将来において、Zという結果または事態に至るかもしれない。Xという現在の行為も、その結果として現在から未来へ向かっての時系列のなかで生起するYおよびZという行為も、行為の共通の主体である行為者が中心となり実行されるわけであるから、行為者そのものに焦点を当てることになる。

過去の出来事を記述する際に、行為者ではなく、対象物に焦点を合わ

せて記述するという構造は、例えると、刑事がある事件の捜査で、犯人（行為者）不明の状況下、事件の一連の「過去」の証拠品、被害者、被害状況を客観的に記録する作業に類似している。能格構造をもっている言語においては、過去の行為を記述する場合、主語（行為者）ではなく目的語（対象物）O NPは、格階層の最上位に位置する格（無標の格）である絶対格で表され構文の中心に置かれる。そして行為者は下位階層に降格され斜めに(in oblique)表象されることになる。

3 ウルドゥー語とバシュトー語の能格

ウルドゥー語の能格の起源については、未だ明らかになっていない。ウルドゥー語は、言語系統的にはヒンディー語と同一であり、ともにデリー、メーラト周辺で話されていたカーリー・ポーリー語をもとに成立していった言語である。古期ヒンディー語には能格の存在は認められず、また中期ヒンディー語の東部方言群に属するアワディー語で書かれたトゥルスィーダース(Tulsidās)の著作にも能格は現れていない。アブドゥルハック ('Abd-ul Haqq) ¹³ によれば、ウルドゥー語およびヒンディー語における能格構造は、おそらく中期ヒンディー語（16-18世紀）から近代ヒンディー語（19世紀以降）、すなわちカーリー・ポーリー語からウルドゥー語（ヒンディー語）への移行過程で出現したものと推測される。また、インド・アーリア語派全体のなかでは、中期インド・アーリア語（Middle Indo-Aryan）のパーリ語における能格構造の出現についての研究文献もある¹⁴。現在能格は、インド・アーリア語派のなかでもウルドゥー語・ヒンディー語、パンジャービー語、マラーティー語、グジャラーティー語などの中央グループに顕著であるが、東グループのベンガル語、ビハラー諸語や東中グループに属する東部ヒンディー諸語（アワディー語など）には存在しない。能格構文は、標準ヒンディー

語を含む西部ヒンディー方言群とアワディー語などの東部ヒンディー方言群の境界線を境に、西の近代インド語派には存在し、以東には存在しないという分布を示している。

一方、イラン語派に属するパシュトー語の能格の起源についてもはっきりしたことは判明していない。確かに古代イラン語には能格構文は存在せず、中期イラン語期に至り、西イラン語の動詞組織において、他動詞の場合に能格構文（あるいは所有構文、または受動構文）が発生した¹⁵。近代イラン語派では現在、パシュトー語をはじめ、バローチー語、クルド語、オールムーリー語、ヤグノーブ語などに能格構文が認められる。また、現代ペルシア語には能格構文はないが、イラン各地には、現在も過去時制に能格構文を保持している方言がある。

以下にウルドゥー語とパシュトー語の能格構文の特徴について、詳しくみていくこととする。

3. 1 形態論的特徴

パシュトー語の場合は過去時制、ウルドゥー語の場合は完了相の場合に能格構文となることは前節で述べたとおりであるが、その際、両言語とも、他動詞文の目的語と自動詞文の主語との間に形態論的な同一性がみられ、かつまた他動詞文の主語は能格で示されるという、一般的な能格構文の特徴をもっている。またその能格は形態論上、具格 (instrumental) あるいは属格 (genitive) と同じ斜格的機能を有するという特徴もある。

ウルドゥー語およびパシュトー語の形態論上の格には主格 (nominative) または絶対格 (absolutive) と斜格 (oblique) がある。主語あるいは他動詞の直接目的語として有標の格標識をとらないで用いられる主格／絶対格に対して、斜格は、格標識、合成後置詞、屈折などで語形

変化したものである。

格機能	ウルドゥー語格標識	パシュトー語格標識
主格	∅	∅
能格	-ne	斜格に屈折
対格	∅ または ko	∅
与格	-ko	-ta
具格	-se	pa-
属格	-ka/ke/ki	da-
所格(in)	-mē	pa-
所格(on)	-par	par-
所格(toward)	-tak	-ta

"child" (ウルドゥー語) と "woman" (パシュトー語)¹⁶でその変化をみてみると次のようになる。ウルドゥー語では直接目的語が代名詞または限定的な目的語のときに、対格は-koとなる。

	ウルドゥー語	パシュトー語
主格	baccā	xaza
能格	bacce ne	xaze
対格	baccā (bacce ko)	xaza
与格	bacce ko	xaze ta
具格	bacce se	pa xaze
属格	bacce ka/ke/ki	da xaze
所格(in)	bacce mē	pa xaze
所格(on)	bacce par	par xaze

所格(toward) bacce tak xaze ta

他動詞文の目的語と自動詞文の主語との間に形態論的な同一性がみられ、かつまた他動詞文の主語は能格で示されるという能格構文は次の例¹⁷で明らかである。ウルドゥー語の能格は名詞の斜格の後にneが付されて示されるが、パシュト語ではneのような接辞は用いられず斜格化された形で能格を表す。

(41) ādmī ne 'aurat māri (Urdu)
 man(OBL=ERG) ERG woman(F,SG,ABS) beat-PF,F,SG
 “The man beat a woman.”

(42) sarī kkhadza wu wahala (Pashto)
 man(OBL=ERG) woman(F,SG,ABS) beat-PAST,F,3SG
 “The man beat a/the woman.”

(43) 'aurat ne ādmī mārā (Urdu)
 woman(OBS=ERG) ERG man(M,SG,ABS) beat-PF,M,SG
 “The woman beat a man.”

(44) kkhadze sarai wu wāhah (Pashto)
 woman(OBS=ERG) man(M,SG,ABS) beat-PAST,M,3SG
 “The woman beat a/the man.”

また、能格の斜格的機能についても次の例で確認できる。

	絶対格	能格	具格	属格
	“a dog”	“a dog”	“by a dog”	“of the dog”
Urdu	kuttā	kutte ne	kutte se	kutte ka

Pashto spe spi pa spi da spi

しかし、ウルドゥー語とパシュトー語の人称代名詞について比較すると、能格構文の行為者は能格で示されるが、目的語として人称代名詞が用いられた場合、ウルドゥー語では対格(-ko)となり、パシュトー語では絶対格で表される。

“I saw him.”

- (45) maī ne us ko dekhā
 I(OBL=ERG) ERG him(OBL) ACC see-PF,M,SG
- (46) mā haʕa wulīdalə
 I(OBL=ERG) he(ABS) see-PAST,M,3SG

(45)では、構文中に主格または絶対格が存在していない。ウルドゥー語の能格構文で、述語動詞に呼応すべき目的語が斜格になっていたり、目的語がない（目的語削除など）場合、動詞および助動詞の活用は男性単数となる。一方、パシュトー語では、その場合、動詞および助動詞は3人称男性複数となる。

ウルドゥー語

- (47) (A) maī ne kahā
 I(OBL=ERG) ERG say-PF,M,SG
 “I said.”
- (b) ham ne kahā
 we(OBL=ERG) ERG say-PF,M,SG
 “We said.”

パシュト語

- (48) (a) mā wuwayal
 I(OBL=ERG) say-PAST,M,3PL
 “I said.”
- (b) mung wuwayal
 we(OBL=ERG) say-PAST,M,3PL
 “We said.”

3.2 述語動詞の活用

ウルドゥー語の完了相およびパシュト語の過去時制における述語動詞は、自動詞文では主体活用 (subjective conjugation) をし、主語の指標をその動詞のなかに内包する (既出の(22)(36)を参照)。一方、他動詞文では、対象活用 (objective conjugation) をし、直接目的語の指標をその動詞の内に含む (既出の(23)－(26)および(37)－(40)を参照)。以下に人称代名詞が目的語として機能した場合の例を示す。なお、3.1で触れたが、ウルドゥー語の能格構文では、直接目的語が代名詞あるいは限定的な目的語の場合 (既出の(45)を参照) は、主格・絶対格ではなく対格になり、述語動詞は男性単数形になる。それに対してパシュト語では、直接目的語は常に主格・絶対格で示され、目的語が省略される場合 (既出の(48)を参照)、述語動詞は男性3人称複数の活用をなす。

ウルドゥー語 (英訳文の大文字・太字部分が主格／絶対格)

- (49) (a) ham nāce
 we(M,NOM) dance-PF,M,PL
 “**WE** danced.”

(b) tum nāce
 you(M,PL,NOM) danced-PF,M,PL
 “**YOU**(PL) danced.”

(c) vo nāce
 they(M,NOM) danced-PF,M,PL
 “**THEY** danced.”

(50) (a) tum ne ham ko bhejā
 you(M,PL,OBL) ERG we(M,OBL) ACC send-PF,M,SG
 “You(PL) sent us.”

(b) maī ne tum ko bhejā
 I(M,OBL) ERG you(M,PL,OBL) ACC send-PF,M,SG
 “I sent you(PL).”

(c) maī ne un ko bhejā
 I(M,OBL) ERG they(M,PL,OBL) ACC send-PF,M,SG
 “I sent them.”

パシュトー語¹⁸(英訳文の大文字・太字部分が主格／絶対格)

(51) (a) mung nācedəlu
 we danced-1PL
 “**WE** were dancing.”

(b) tāse nācedələy
 you danced-2PL
 “**YOU**(PL) were dancing.”

(c) duy nācedəl(ə)
 they danced-3PL
 “**THEY** were dancing.”

- (52) (a) tā mung legəlu
you us sent-1PL
“You were sending **US**.”
- (b) mā tāse legələy
I you sent-2PL
“I was sending **YOU**.”
- (c) mā duy legə(ə)
I them sent-M,3PL
“I was sending **THEM(M)**.”
- (d) mā duy legəle
I them sent-F,3PL
“I was sending **THEM(F)**.”

4 能格における意味論的特徴

分裂能格には、時制や相によって能格構文が出現する場合以外にも、動詞の意味論上の特性によって格表示が決定されるグループがあることは、第2節において説明した。特に、行為者の意志作用が強く働く動詞は能格構文となり、無意志動詞では主格構文となる。パシュトー語には、このような動詞が内包する意味による能格構文は存在しないが、ウルドゥー語では、一部の動詞に意味論上の分裂能格構文が出現する¹⁹。

例えば、ウルドゥー語では自動詞のなかでも能格構文となる動詞がある。(53)のchīk- “sneeze”やnahā- “bathe”、khāś- “cough”などがこの種の自動詞である

- (53) āmrā-ne chīk-ā
Amra(F,OBL=Erg) sneeze-PF,M,SG

“Amra sneezed.”

(53)の事例は、一種の語彙的例外とみなされるかもしれないが、次の(54)の例文は、ウルドゥー語の能格は、純然たる構造的格 (structural case) 機能として働いているだけでなく、行為に対して動作主の何らかの意図、意志が作用する場合にも用いられることが考えられる。

- (54) a. āmrā cīx-ī
 Amra(F,NOM) scream-PF,F,SG
 “Amra screamed.”
- b. āmrā-ne cīx-ā
 Amra(F,OBL=ERG) scream-PF,M,SG
 “Amra screamed on purpose.”

自動詞のcīx- “scream”は過去完了相において、主格構文と能格構文の両方をとっている。(54)aは「思わず叫んだ」という意味だが、(54)bでは、「(何らかの目的で) わざと叫んだ」と意味解釈する。このような有意志を表現する場合に能格構文をとる動詞には、hās- “laugh”やro- “cry”といった喜怒哀楽の行為を表す動詞が含まれ、次のような分裂をもつ自動詞といえる。

- a. intransitive / non-volitional / nominative
 b. intransitive / volitional / ergative

ウルドゥー語の能格構文は、完了相という文法的機能からだけでは説明できず、意志や意図が働く (volitional) 場合に出現することがあるというのが(54)の事例であるが、ラホール・ウルドゥーでは、そのことを例証する(55)の文が成立する。

- (55) a. anjum-ko xat likh-nā hai
 Anjum(F,OBL=DAT) letter(M,SG,NOM) write-INF,M,SG
 be-PRS,3SG
 “Anjum has to write a letter.”
- b. anjum-ne xat likh-nā hai
 Anjum(F,OBL=ERG) letter(M,SG,NOM) write-INF,M,SG
 be-PRS,3SG
 “Anjum wants to write a letter.”

(55) a は、与格 NP である anjum-ko が、「書く」という不定詞 likh-nā の動作主として機能して、なおかつこの構文は義務「ねばならない」を表している。また不定詞とコピュラ動詞は目的物である「手紙」 xat の性・数に一致する。一方、(55) b の文は、能格の格標識である -ne 以外は構造的に (55) a と全く同じであるが、能格を用いることによって、「願望」という動作主の意思を表現している。(55) の a と b の文の相違は、ウルドゥー語の能格は、相という観点からの解釈以外にも、「意思」(volition) という一種の法の構造的な役割を果たす場合があることを示している。

ラホール・ウルドゥーに (55) b の表現があるのは、文法構造上においてパンジャービー語の影響があると考えられる。パンジャービー語では (56)²⁰ のように、必要・義務・強制の表現としてウルドゥー語と同じように「不定詞+コピュラ動詞」の構文となるが、動作主は与格ではなく能格となる。

- (56) os ne āñā e
 he(OBL=ERG) come-INF,M,SG be-PRS,3SG

“He has to come.”

さらに、ウルドゥー語の複合動詞をみると、能格にはvolitionalな役割が果たされるときがあることがわかる。

- (57) a. anjum-ko kahānī yād ā-ī
 Anjum(F,OBL=DAT) story(F,SG,ABS) memory come-PF,F,SG
 “Anjum remembered the story. (Memory came to Anjum.)”
- b. anjum-ne kahānī yād kī
 Anjum(F,OBL=ERG) story(F,SG,ABS) memory do-PF,F,SG
 “Anjum remembered the story.”

ウルドゥー語では、喜怒哀楽・好悪、苦痛といった感情、状態・知覚・記憶・技能・出会い・入手・義務・強制・所要時日などを表す文では、主語に当たる名詞・代名詞は与格-koの形をとる²¹。(57)aにおいては、「思い出した」という行為は自然発生的であるのに対して、(57)bでは、動作主の積極的行為として表現されている。この例文以外でもウルドゥー語では、非意思を表す場合は(57)aのような複合自動詞+動作主与格構文が頻繁に用いられる。複合自動詞を複合他動詞に変えると、動作主は主格(未完了相)または能格(完了相)になる。この場合は、行為に対して動作主の意思作用が強く働く機能があるという解釈が可能である。すなわち、ウルドゥー語の能格構文においては、文法構造上は斜格的機能として能格は位置づけられるが、述語動詞が内包する意味論的屬性次第では、能格構文をとることによって、行為に対する動作主の意味上の有標化という機能が働くのである。

- ¹ Primus, B. Cases and thematic roles. Tübingen, Niemeyer, 1999, p.6-7.
- ² Comrie, B. "The ergative; variations on a theme". *Lingua*. 32, p.239(1973).
- ³ De Rijk, R.P.G. Redefining the ergative. Cambridge, Mass, MIT Press, 1966, p.1-2.
- ⁴ Dixon, R.M.W. Ergativity. Cambridge, Cambridge University Press, 1994, p.9-10.
- ⁵ *ibid.*, p.70-110.
- ⁶ Tschenkeli, K. Einführung in die georgische Sprache. 1. Zürich, Amirani Verlag, 1958, p.64,150,500.
- ⁷ 縄田鉄男. パシュトー語入門. 東京, 大学書林, 1985, p.56.
- ⁸ Shackleton, C. Punjabi. Sevenoaks, Hodder and Stoughton, 1972, p.82.
- ⁹ 萩田博. 基礎パンジャービー語. 東京, 大学書林, 1996, p.62,70,80,84.
- ¹⁰ 鈴木斌. 基礎ウルドゥー語. 東京, 大学書林, 1981, p.107,116,130,137.
- ¹¹ 亀井孝,河野六郎,千野栄一. 言語学大辞典. 第6巻. 東京, 三省堂, 1996, p.1049.
- ¹² Dixon, R.M.W. *op.cit.*, p.97-99.
- ¹³ 'Abd-ul Haqq, M. Qawā'id-ē Urdū. Lāhor, Lāhor Akedamī, [n.d.], p.184.
- ¹⁴ Peterson, J.M. Grammatical relations in Pali and the emergence of ergativity in Indo-Aryan. München, LINCOM Europa, 1998.
- ¹⁵ 亀井孝,河野六郎,千野栄一. 前掲書, 第1巻, p.676.
- ¹⁶ パシュトー語の格変化については下記の拙論を参照されたい:
八代隆政. "パシュトー語ペシャーワル方言について". 言語と文化. 11,

p.66-91(1998).

¹⁷Bellow, H.W. A grammar of the Pukkhto or Pukshto language. Peshawar, Saeed Book Bank, 1983, p.23.

¹⁸Tegey, H. "Ergativity in Pashto". Pashto quarterly. 1, p.9(1975).

¹⁹Butt, M. The structure of complex predicates in Urdu. Stanford, CSLI Publications, 1995, p14-17.

²⁰萩田博. 前掲書, p.141.

²¹鈴木斌. ウルドゥー語文法の要点. 東京, 大学書林, 1996, p.88.